

# 若者言説における心理学的知の作動

1970-2000年代の「モラトリアム」概念の分析を事例として

東京大学大学院 小川豊武

## 1 目的

本報告の目的は、日本の若者言説において、心理学の専門的知識が、どのようにして日常的知識として広く社会に浸透してきたのかを明らかにすることにある。心理学的知識を利用して現代の若者の実態を解明するというスタイルの言説の中で、最も一般的に普及したものが小此木啓吾の「モラトリアム人間」であろう。岩佐淳一によれば「モラトリアム人間」は、若年層を、その多様性を捨象された「社会的性格類型」に還元して語るという点で、後の若者論のプロトタイプとして位置づけられる重要な概念だという（小谷編 1993）。このような若者類型は近年の社会学ではステレオタイプとして批判される傾向が強いが、本報告ではむしろ、そのような「一部の極端な事例を社会全体にまで敷衍して若年層を理解するということ」それ自体の社会的条件や意味を問い直すことを目的としたい。

## 2 方法

以上の目的から、本報告では若者言説における「モラトリアム」の概念分析を試みる。概念分析という方法は様々な文脈で用いられているが、ここでは近年エスノメソドロジーの領域で盛んに行われているテキストの知識社会学を想定している。すなわち、ある概念の用いられ方や他の概念との連関を分析することにより、概念を用いている人々の規範を解明するという方法である（酒井他編 2009）。具体的なデータとしては、まず日常的知識から専門的知識が形成される側面として心理学の専門文献を取り上げ、「モラトリアム」概念の形成過程をたどる。次に専門的知識から日常的知識が形成される側面として新聞や雑誌などのマスコミ言説を取り上げ、「モラトリアム」概念の普及過程を明らかにする。

## 3 結果

現時点での分析結果としては、第一に、若者言説は「モラトリアム」という心理学的概念を利用することにより、そのような心理を「顕在化」させていない若年層も「潜在的」に持ち合わせているというロジックが可能になり、その結果として際限なく適用範囲を拡張することが可能なカテゴリーを創出していたと考えられる点が挙げられる。第二に、当初は現代の若者を理解するための「社会的性格」として作られた「モラトリアム」概念が、当の若年層自身に受容される場面では、とりわけ先行世代と比較して自らの世代認識の困難を感じていた層にとっては、ある種の「世代アイデンティティ」として機能していたと考えられる点が挙げられる。

## 4 結論

「モラトリアム」概念は 90 年代以降の若者論にも形を変えて継承されて行くが、概念自体だけではなく、以上のような概念の使用法もその後の多くの若者論に受け継がれているといえる。「モラトリアム」に見られた概念的特性は、近年の「若者論」批判が統計データを示して反証していくのみだった数多くの民間若者論の社会的機能に新たな光をあてるものと思われる。

## 文献

小谷敏編, 1993, 『若者論を読む』世界思想社

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版